

“作品A” (F 100号キャンバス 混合白の上に油彩)



“作品C” (F 60号キャンバス 混合白の上に油彩)

油絵作品の追求

大澤 節子

A Pursuit of Oil Painting

Setsuko Ohsawa

はじめに

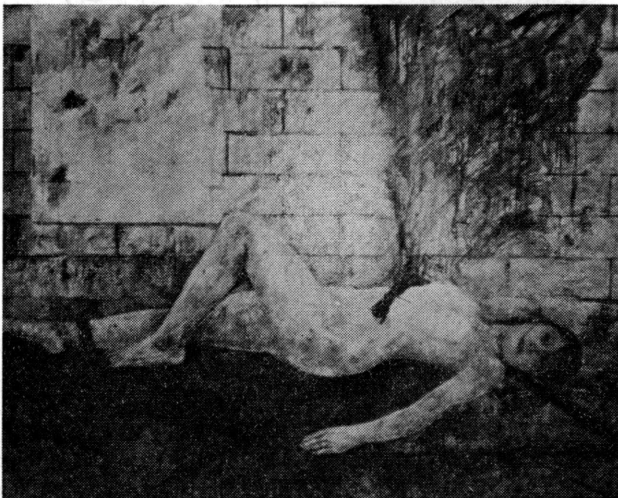
白いキャンバスに、一塗りするだけで“自分の世界”が開けてくる。そこには自由がある。しかし、ふと気づくと茫然とキャンバスの前に、筆を握って、立っている自分に気づく。

自由に描いていいはずなのに、形も色も何も自由にできない、そんな時がある。

1. 視点

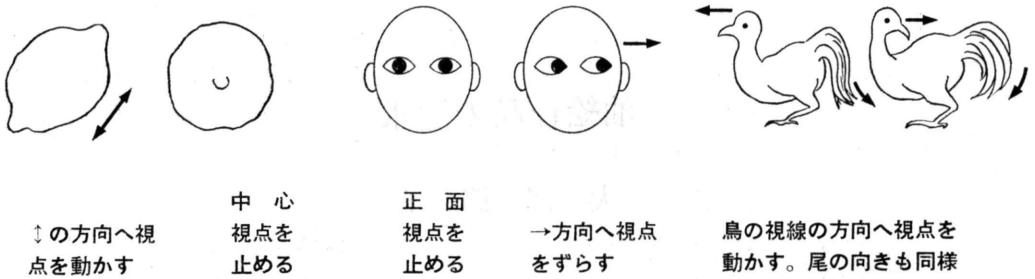
卒業制作の時は、ただ単に自分の感情のままに筆を走らせていたように思う。それはそれで良いと思うのだが、ものにはすべて、存在感というものがあがり、一枚の絵の中での位置や方向性により、その絵の組み立ても変わってくるものだと思う。

意図的に、木の枝の伸びる方向や、レモンの置き方、人や鳥などの視線などを構成し、画面



“卒業制作”

F 100号キャンバス

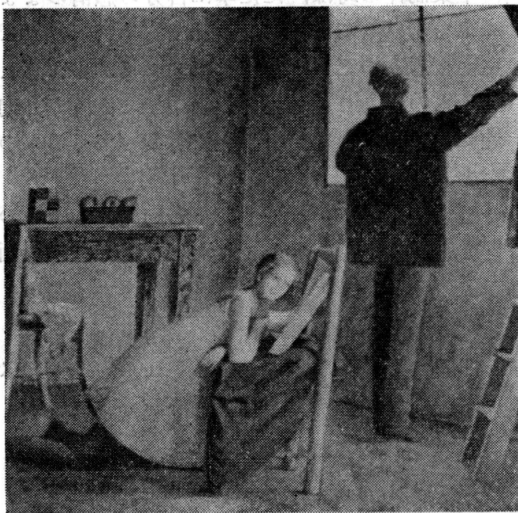
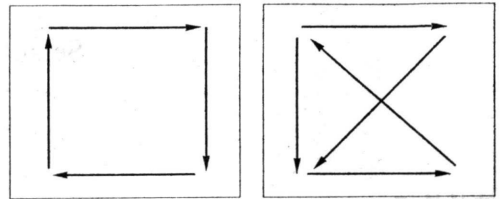


に動きを与えることによって、鑑賞者の目の動きも変わってくる。

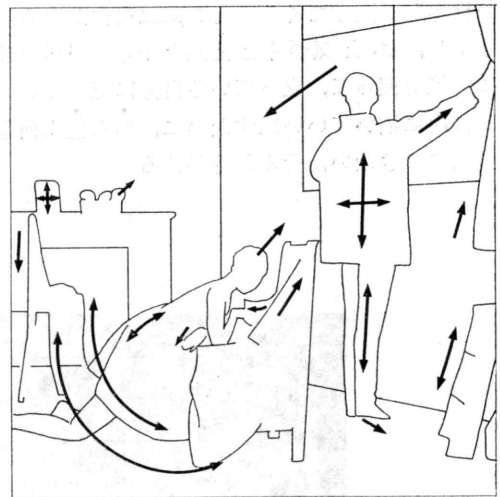
このような構図は、マチス、セザンヌ、バルチャスなどにも多く見られるが、古くは中国などの唐紙や屏風、また日本の障壁画のほとんどに見ることができる。

そういった事をふまえ、自分の作品をつめていく事にした。

(画面)



バルチャス作 画家とモデル 226.5×230.5 cm
1980-81年 カゼイン・テンペラ、麻布 パリ



図解

1. モチーフ

私の絵の中に登場するモチーフは、鑑賞者に向かって、正視するポーズをとる人物、箱、棒などの小道具である。

空間構造を考え、平面と立体、直角と円を基

本にして考えながら構成することが多く、構造上必要とするモチーフは、アドリブ、或いは一休みの遊び場として考えている。

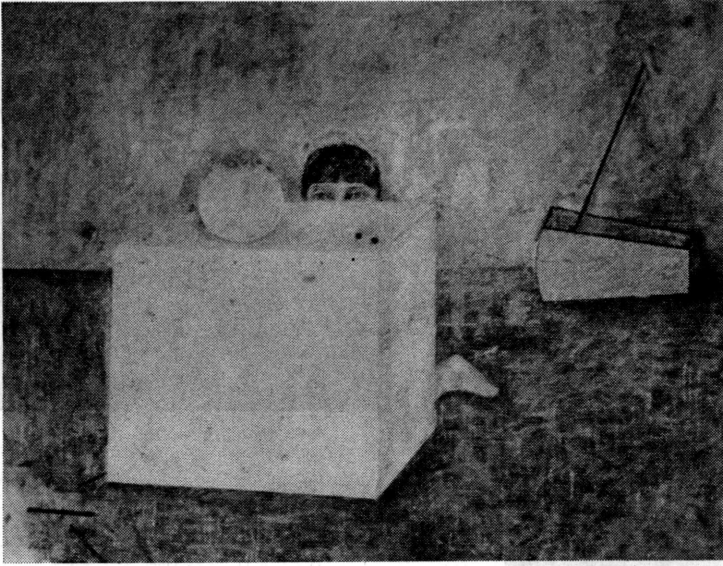
気に入ったものを取り出し、位置、色、形、大きさを考えながらイメージと記憶の合成による静物画的な風景画にしている。

3. 作品

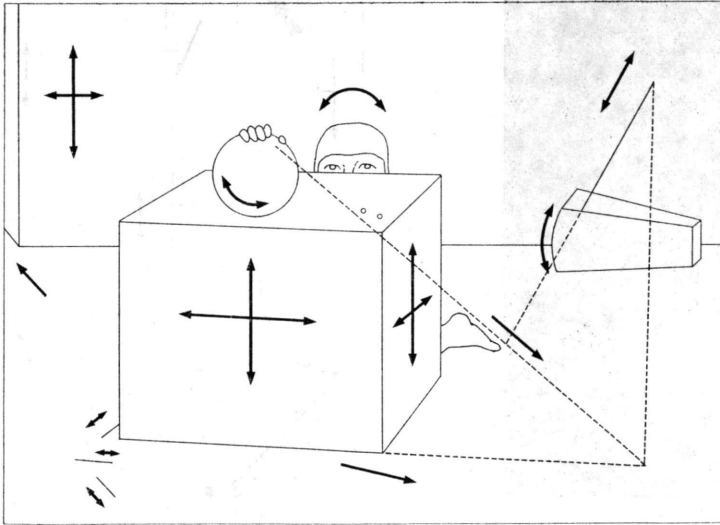
“作品A” 日常生活の中で身近な平面と言える壁と床。そして、そこに位置された立体。(この場合、直角な白い箱、その上の球、壁ぎわの青い箱) それを大胆に扱うことで空間構造

の大きさを意図した。

また、子供の全身を描くのではなく、部分(箱からのぞいた頭部、指、足)を描く事により、逆に、子供の存在を、きわだたせることができたらと考えた。



“作品A”
(F100号 キャンバス
ス 混合白の上に
油彩)

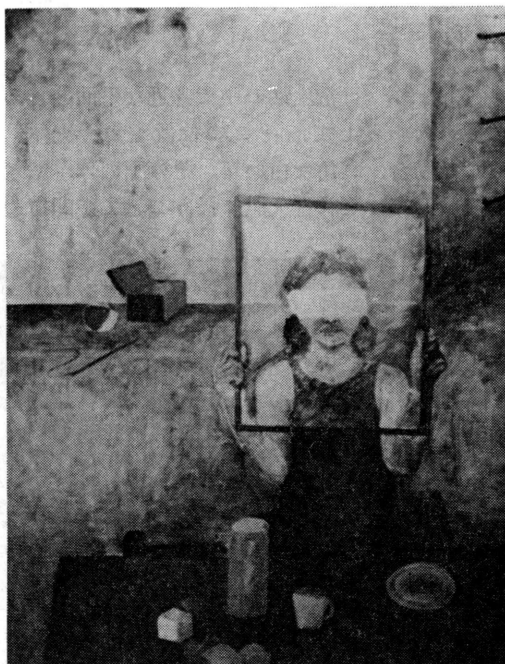


“作品A”
(図解)

“作品B”，作品Aと作品Bでは共通したモチーフ（子供，直線的な形態，日常的な小道具）を続けて描くことにより，自分の視点をより深く見つめ通そうと考えた。

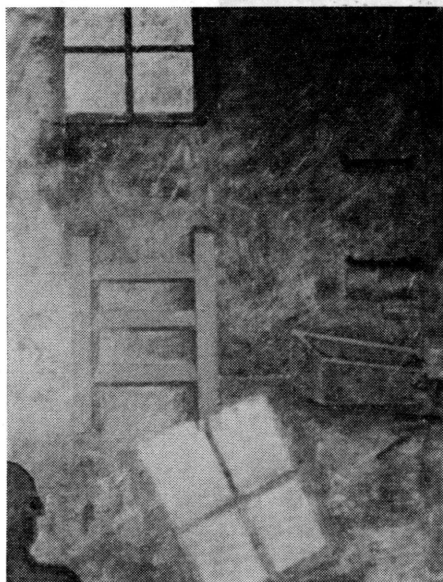
また，どちらも子供が主なモチーフとして描かれているが，子供がもつ，小悪魔的な神秘さに惹かれモチーフとし，構図やポーズなどを工夫した。

“作品A”では，子どもの身体を隠したが，“作品B”では目を隠すことにより，時間が一瞬停止したような，無言のまま謎めいた存在の保持を表現することにより，子供の神秘的な存在と空間をきわだたせたと考えた。

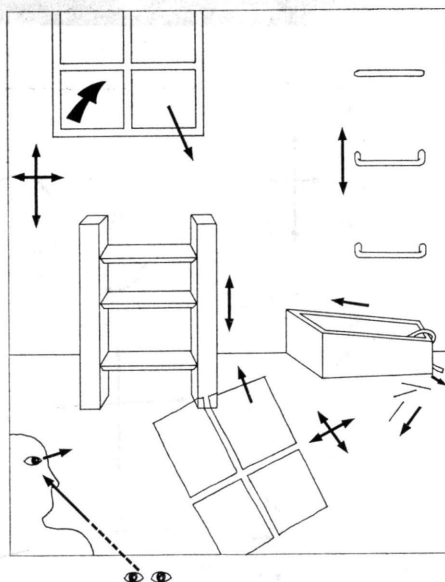


“作品B”
(F 80号キャンバス)
(混合白の上に油彩)

“作品C”



“作品C”
(F 60号キャンバス)
(混合白の上に油彩)



(図解)

“作品 C”では、自然の中に起きる現象を自己の個性、作品の自立性という問題にかかわりながら描いた。

壁に窓、取っ手を置くことで、壁という平板な面の存在をより強くし、先に述べたように、視点の動きを、さそうようにした。また、はしごもそのままただ置いても上下の動きを意識させることのできるモチーフであると考え、選んだ。

左隅にある人影は、物理的には窓の光とは矛盾するが、人影を描くことによって、鑑賞者に自分と同じ視点を持つ人の存在を画面の中に、意識させることができると考え、そのことからはしごが下に映った窓と共に、部屋の外へ鑑賞者の視線をさそい、屋外の空間にまで意識をのばせたらと考えた。

“作品 D”室内の空間だけではなく、大きな空間構造をねらい、描いた。

自然と人間の生をかけた接点、例えば、道や建物などが自然とじっくり溶けあって感じられた時に、理屈を離れて、自分なりに自由に構想し、描いた。

また、ここでも人間の造った物（道や家）な

どの直線的な形と木や空といった生きているものの有機的な優しさを持った形のからみ合いを表現できたらと思い描いた。

4. 技法

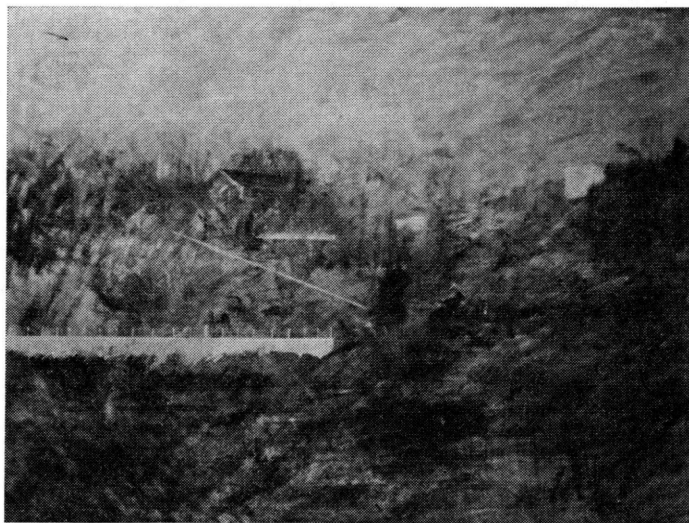
私の基本的な技法は、グラッソである。

まず、テンペラ技法の一つ、混合白（印のエマルジョンと粉末のチタニウムホワイト&シルバーホワイトを使用）で下地をつくり、その上に、不透明な厚塗り（強めの濃淡をつくる）をし、再度、上に透明な色で薄く塗り重ね、透けてみえる色の効果を使い制作している。

透明、不透明、厚塗り、薄塗りを組み合わせ、深みのある絵はだや色相を造りたいと思っている。

しかし、このグラッソの技法は、下塗りの乾きをていねいに、待たなければならないので、描きたい気持とのタイミングが難しいのが難点である。

油絵の具の代りに、乾きの速い、アクリル絵の具も考えているが、どうもあのペラリとした質感やくいつきの悪さが、どうも好きになれそうにない。



“作品 D”

(F 80 号 キャンバ)
ス 混合白の上に
油彩

簡単なテンペラの併用や小作品のガッシュも考えているところである。

おわりに

二年間の研究は、これで終わってしまうのだが、一枚一枚が練習と実験のようなもので、満足のいく仕事はできなかつたように思う。構図を気にするあまり、反対に、固くなってしまったように思う。もっと自由に感情を、ぶつけたところがあっても、いいような気がする。二つを、どううまく表現するか、今後の課題になりそうだ。

一般的に巨匠といわれてきた画家たちは、25, 6歳までに技術を身につけてしまい、36, 7歳ぐらいで傑作を描いている。私は巨匠ではないの

だから気にしなくていいのだが、“才能 なんか ないのだから、いくら描いたって、材料と時間の無駄ではないか”という気持と“好きなのだからいいじゃないか、これからかも知れない”という楽天的な気持ちが交互にやってきて、筆を投げては、また拾いといったことがある。

これからも、そんなことを、くり返しながらいままでやってきたことを頭におき、自分にじっくりいく材料や技法を身につけ、感情、創造性、形、色、空間、そして作品の自立性という問題を明解に表現して行きたいと思う。

今回の研究にあたり、ご指導いただきました酒匂先生をはじめ諸先生方、生活科学研究所の先生方に心より感謝を申し上げます。